

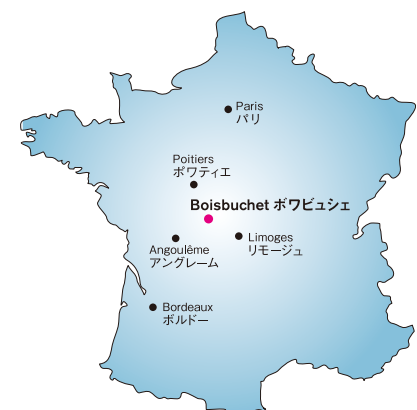


ドメーヌ・ドウ・ボワビュシェ

Domaine de **Boisbuchet**

デザインに捧げられた^{ドメーヌ}所有地の夏

写真 アドリアーノ・A・ピオンド 文 鴨澤章子



ドメヌ・ドウ・ボウビュシェ。一般にはまだあまり知られていないかもしれないが、世界中のデザインや建築関係者の間では知らぬ人はいないというほど有名なのが、このワークショップ施設だ。夏の間の1週間から10日間、フランスの豊かな自然の中に身を置き、世界的に著名な講師のもとで創作活動を行う。テーマはサステイナブルデザインだったり、紙や竹など素材を限定したりとさまざま。参加者たちは世界中から集まってくる老若男女。敷地内にある宿泊施設に泊まり、敷地内で採れるオーガニックな食物を食べ、講師や参加者たちと朝から晩までさまざまなことを語り合う。目的は作品づくりだけではなく、またデザインや建築の専門家である必要もない。なにかクリエイティブなことをしたい、なにか新しいことをしたいという気持ちがあれば、だれでも参加できる。日常から離れて、新たな刺激を得、心身ともにリフレッシュする——そんな夏の過ごし方もバカンスといえるかもしれない。

なにもない場所

朝もやの中から城が浮かび上がる。少し離れた中庭では、朝食の準備が始まっている……。ここはフランスの南西部にある「ドメーヌ・ドウ・ボワビュシエ」というワークショップの施設。デザインや建築、食などにまつわる様々なワークショップに参加するために世界中から人々が集まってくる。

パリからTGVと車を使い継ぎ3時間。150ヘクタールの広大な敷地内には、19世紀後半に建てられたシャトーや宿泊施設が点在し、湖や川が広がる。ヨーロッパはもとより南米やアジア、アメリカからの参加者たちの共通言語は英語だ。片言であっても熱心に語り合う人々を見ていると、ここがフランスの片田舎であることを忘れてしまう。

かつて荒廃した領地だったこの地をワークショップの別天地に変えたのはアレキサンダー・フォン・フェゲザックという一人の男だ。世界的に有名なヴィトラ・デザイン・ミュージアムを創設から20年以上にわたって率いてきた人物として知られるが、ボワビュシエとの関わりはそれ以前からのこと。若いころは演劇に傾倒していたフォン・フェゲザックだが、ボワビュシエのある地域一帯にある手つかずの自然に魅せられ、一人、幌馬車で馬と共に旅していた時期がある。同時期にスペインのアンダルシア地方で曲木の椅子に出会い、トーンの椅子など家具の収集を始める。その後アメリカで暮らし、トーンネットの木の製作に関わり、また展覧会をキュレーションするなどしてヨーロッパに戻ったのが1986年のことだ。「今度はどこかに拠点を作って、ワークショップを提供したり、シアターをつくりたいと思ったのです」

そこで見つけたのが、かつては貴族の領地だったボワビュシエだ。彼は資金を作るため、レイ・イームズ(チャールズ・イームズの妻)の紹介で、当時ヴィトラ社の社長であったロルフ・フェルバウムにコレクションの一部を売却し、その土地を購入した。それがきっかけとなり、ミュージアムの創設を構想していたフェルバウムに請われ館長に就任することになった。

「ミュージアムのオープンが1989年の11月で、ボワビュシエの整備に着手できたのも同じ月でした。その上、この月にはベルリンの壁が崩壊して、何もかもが新しく始まったのです」

フォン・フェゲザックはヴィトラ・デザイン・ミュージアムから車で8時間も離れたボワビュシエをさまししながら、展覧会をつくり、さらにはワークショップをまずミュージアムで始めた。最初の講師はロン・アラッド。ジャスパール・モリソンやデニス・サンタキアラも何度か講師を務めた。だが、ヴィトラ・デザイン・ミュージアムのある場所には宿泊施設がないため、ワークショップの時間以外に密なコミュニケーションがとりづらく、またデザイナーたちも通常の仕事から離れにくいことも問題だった。そこでワークショップの拠点をボワビュシエに移したのが94年。初年の参加者は20〜30人ほどだったが、成果は明らかだった。

自然のなかに身を置くこと

「やはり大自然の中に身を置くことが大切なことです。ここには自然以外何もない。だからこそ驚くほどみな創作に集中できるのです」

例えば大学で行うようなセミナーだと、コンセプトが固まり物事が動き出すのに2か月かかるようなことが、ボワビュシエなら2日でできてしまう。寝食をともにするボワビュシエでは、だからともなく自然と会話が生まれ、その刺激の中

で創作に熱中でき、また周囲の自然からインスピレーションを得られることも大きな違いだ。

「ここに来る人はなにかクリエイティブなことをして、それを他の人とシェアしたいという点で共通しています。だから他の参加者とのコミュニケーションで大きな感情が生まれ、とても刺激的なのです」

現在では毎年6月から10月の間、約30のワークショップを行い、参加者は500名にまで増えた。国籍、年齢、職業もさまざまで、デザインや建築を学ぶ学生やプロも多いが、それらとはまったく関係のない30代から60代の参加者も少なくない。

たとえばチューリッヒ在住のホテル・コンサルタント、レグラ・ワイスリングさんもそんな一人。彼女は昨年初めて陶器ワークショップに参加し、今年もスター・デザイナーのハイメ・アヨンから直接、陶器製作を教わった。

「私はデザイナーではありませんが、食器類はホテルの大切な要素なので興味は以前からありましたが、なにか手を動かしてものをつくることでしたかったんです。去年たまたま陶器のワークショップがここであることを知って、『まったくの素人ですが参加できますか』と聞いたたら、『もちろん』って」

またパリから参加しているジャン・シル・カーンさんはエコノミスト。10年前から毎年なにかのワークショップに参加し、今年も「社会責任のあるデザイナー」というテーマで行ったシガ・ハイミスのワークショップに参加した。

「ボワビュシエに参加するうちに、なにかデザインで社会の役に立ちたいと思いはじめ、今はチュニジアをデザインで後援するNPOをつくることを計画しています」

ボワビュシエには彼らのように一度来たら何度



2011年、ボワビュシエのシャトー内で開催された「Naked Shapes」より。日本の戦前戦後につくられたアルミニウム製品を紹介した本『裸形のデザイン』にフェゲザックが偶然出会い、「ぜひヨーロッパに紹介したい」と実現した展覧会だ。(写真:大友洋祐)

アレキサンダー・フォン・フェゲザック/1945年、ドイツ・チューリンゲン生まれ。ヴィトラ・デザイン・ミュージアム前館長。ドメーヌ・ドウ・ボワビュシエ創設者。アートコレクターとしても知られ、デザインに関する著作も多数ある。後ろの壁に掛かるのは、ワークショップでカンパーナ・ブラザーズが参加者とともに制作した作品。

Alexander von Vegesack

アレキサンダー・フォン・フェゲザック



も参加するリピーターがとても多い。1年に1度、ここで過ごすことで、日常から離れた刺激を得、身も心もリフレッシュできるからなのだろう。講師たちにとっても、ボワビュシエでワークショップをすることは楽しみのひとつで、今年のハイメ・アヨンのように家族みなで訪れることも多い。リラックスした環境のなかで、参加者たちとひとつの目的に向かって創作をすることで、彼ら自身もインスピレーションを得ることが多いという。また最近では、企業が研修や社内コミュニケーションの活性化のためボワビュシエでワークショップをすることもあり、一昨年にはエルメスのデザインチームも訪れた。

ワークショップの最終日にはその成果を各自が思い思いのスタイルでプレゼンテーションするのが恒例だ。どんな作品であれ、自分たちの作品を発表する参加者の顔は輝いている。

「結果は大きな問題ではないのです。自分のアイデアを膨らませ、それをどう構築していくかを学び、自分自身のスタイルを認識することが大切なのです」(フォン・フェゲザック)

生み出された成果

20年近くワークショップをするうちに、その行程で生み出されていった数々の実験的な建築物も敷地内に増えていった。日本の建築家、坂茂がヨーロッパで初めて建てた建物もここにあれば、コロンビアの建築家、シモン・ヴェレスが参加者と建てた竹とペットボトルなどで作った建物もある。それらはみな目的があって建てられたもので、ミーティングや宿泊施設として使われている。島根県から寄贈された日本の古民家を移築した際には、日本から来た大工や左官から日本の伝統的な職人技をワークショップ参加者が学んだ。こうした建物自体もすべてワークショップ参加者

たちにとって生きた学習教材になる。4年前からはこうした建物が評判となり、一般にもガイドツアーという形で敷地内を公開するようになった。さらに3年前からは夏の間、シャトー内で展覧会を開催している。昨年の展覧会は1920〜60年代につくられた日本のアルミ製品のコレクションを見せる「Naked Shapes(裸形のデザイン)」だった。

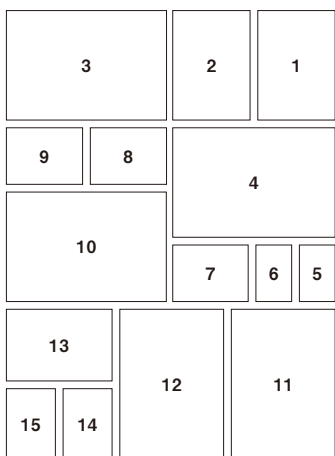
「私の家具コレクションはバウハウス様式のものが多いのですが、その源流のひとつは日本だと言っていると思います。私のデザイン観や美的感覚に日本はとてもフィットするということだと思いません。シンプルでミニマな日本の日用品の展覧会には、ワークショップ参加者たちもとても関心を持っていました」(フォン・フェゲザック)

今年竹をテーマに、前述のシモン・ヴェレスと、マリア・ブライセの展覧会を行い、来年には、「BORO」と国際的にも呼ばれる津軽地方で継ぎ接ぎしながら大切に使われていた着物や寝具を見せる展覧会を予定している。

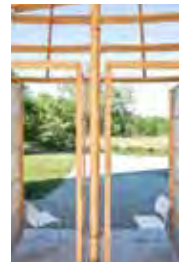
来年は数千冊にも及ぶ膨大なフォン・フェゲザック自身の所蔵本によるライブラリーの創設を予定しており、そのほかにも美術大学とのコラボレーションや宿泊施設の増設と、ボワビュシエは毎年成長し続けている。

「私は自分が今まで世界中で体験してきたさまざまなこと、展覧会や本をつくったり、家具をコレクションしたりといったことを、ここに集約して、他の人にも体験してもらいたいです。喜びを学び、英気を養い、新しい世界を発見する……それがボワビュシエなのです」

近い将来には広大な敷地内の自然を生かして、ランドスケープや農業のワークショップも開催したいと目を輝かせる。
フォン・フェゲザックの夢に終わりはない。



1 シガ・ハイミス(右)のワークショップ光景。2 カナダからの参加者ソニア。今回のワークショップでつくられたデザインは、貧困世帯の女性たちの経済的自立を助成するインドのNPOに無料で提供される。3 敷地内の坂茂による建物。紙管を用い、ワークショップの参加者たちとたった4日間で作ったものだ。4 ハイメ・アヨン(左端)のワークショップは、陶器の街リモージュにある美術大学ENSAの整った施設でも行われた。5 デイナー風景。6 ドイツの建築家・アーティストのマークス・ハインズドルフの竹を使った実験的な作品。120平方メートルだが軽量なので150人で持ち上げることができる。(全景は10)。7 島根県から寄贈された日本の古民家。偶然にもボワビュシエのシャトーと同年代に建設されたもの。8 シャトー内で行われていたマリア・ブライセの展覧会より。9 シモン・ヴェレスの展覧会は敷地内に点々と展示された作品を見て回る形式。11 陶器ワークショップより。12 エンジニアであり建築家のヨルグ・シュライヒによるドームの内部。ミーティングなどに使われる。13 かつては馬小屋だった場所をコンピュータールームに改装。14 シガ・ハイミスのワークショップに参加していたエダ。アイランド美術大学を卒業した自分へのギフトとして初めてボワビュシエに来た。15 宿泊施設の一部。



ドメーヌ・ドゥ・ボワビュシェ
Domaine de Boisbuchet 16500 Lessac France
Tel: +33(0)54589 6700 info@boisbuchet.org www.boisbuchet.org